

マーシャル諸島・核実験避難島での生活再建
 中京大学社会科学研究所特任研究員
 中原聖乃



マーシャル諸島の核実験は62年前に行われていますが、今日は、60年以上たってもまだ避難を強いられている人たちの現在の様子を中心にお話をしていきたいと思います。

この写真は3年前に撮った写真です。撮影した場所は、水爆実験の時に被曝した人々が避難しているメジヤト島というところです。私はこれを生活再建のシンボルとして見ています。写真の中で、女性が座っている麻袋が大事です。この麻袋は、現地で作ったものが入っていますが、これを今からこの船に乗せて、あちらの大きな運搬船に運んでいきます。そして、この袋は首都から、海外に出荷されることになるわけです。

ここに入っているもの、これは何でしょうか。今、日本ですごくはやっているものです。

（会場から「ココヤシ」）

はい、そうです。ココナッツオイルの原料、現地ではコブラと言われていますが、それがこの中に入っています。これはココヤシの実からつくるもので、私たちはオイルにして使っていますが、液体で輸出をするのは大変です。その前の段階、ココヤシの中身の果肉の部分を取り取って、水分だけ蒸発させて、繊維質と油のものを詰めています。輸出した先でそれを圧搾、絞り出してココナッツオイルとして使っています。

これはコブラが入っているわけです。ある程度のココヤシの本数がないと採取することができません。しかも、避難地は自分の土地ではないので、他人の土地で勝手に生産物をつくることはそもそも難しいです。現在はこれができるようになったことで、生活が整ってきているなど感じます。

それでは、ここに至るまでの過程を、核実験の歴史を踏まえて、生活の変化を中心にお話をしたいと思います。

先ほどの尾松さんのお話が非常に正確なデータを用いて、法律や制度的側面からお話しされましたが、私の話は少し違う側面からお話します。私の専門は文化人類学です。きょう私はこういう格好をしていますが、マーシャルではTシャツに普通のスカートにゴム草履履いて、ずた袋みたいなものを持って、電気も水道もないところで生活をしています。マーシャルの人もよく日本に来られますが、私に会うと全然わかりません。そういうところでの生活の様子をお伝えしたいと思います。

マーシャル諸島は、正式な国名をマーシャル諸島共和国といいます。1986年に独立しました。独立する前、16世紀にスペインによって発見され、19世紀にはドイツの植民地統治下に置かれます。その後、20世紀になって日本の植民地統治下に置かれます。マーシャル諸島は、日本語の名残が少しあります。例えばゾーリ（草履）やベンジョ（便所）などいろいろな日本語が残っています。

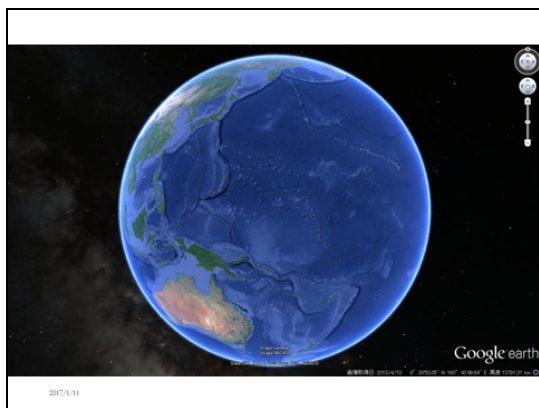


マーシャル諸島の国土は、画面の背景に見え

ている環礁と言われる地形でできています。これは、火山が海底に沈み、その上にサンゴが隆起してできたものです。たとえば、阿蘇の外輪山と似ているかもしれません。サンゴが成長したところはこのように島になっています。あまり成長できなかったところは水深が1メートルとか2メートルとか、浅瀬になっています。また、サンゴ礁が輪になってつながっていることから、環礁と言います。

これを全部合わせると、面積は181平方キロメートルですが、これは名古屋市の半分、西宮市のちょうど2倍の面積になります。西宮市の2倍のところには5万人しか住んでいません。これを少ないと思われる方もいると思うのですが、このくらいがたぶん適切だと思います。

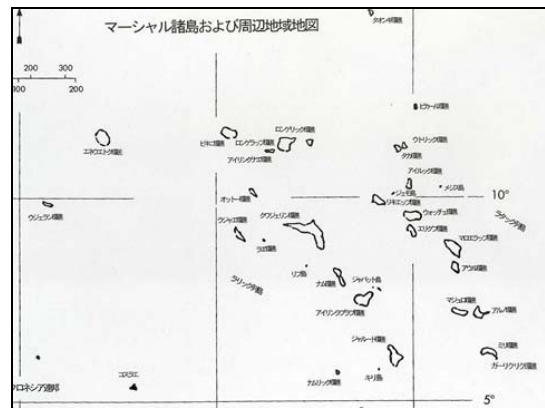
というのは、自給自足を基本として暮らしていますので、西宮のようにぎっしりと住んでしまうと、農産物をつくることができません。また、ラグーンと呼ばれるサンゴ礁で囲まれた内海は外洋の荒波を遮ってくれるので、ラグーン内は非常によい漁場になっています。基本的に1つのサンゴ礁を中心として生活圏ができ上がっていますが、この1つの生活圏が、基本的には1つの自治体になっています。マーシャル島には24の自治体が存在しています。



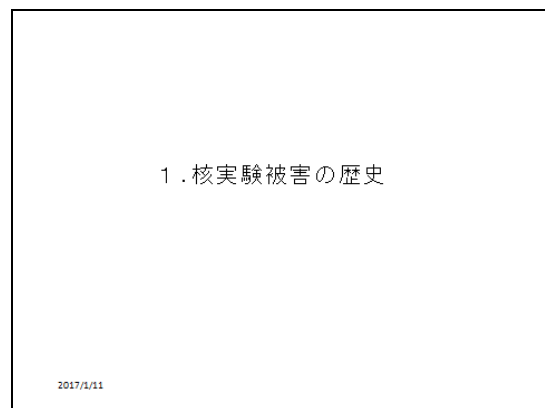
マーシャル諸島は太平洋のほぼ真ん中に位置しています。マーシャルはハワイとニューギニアを結んだちょうど真ん中にあります。これだとちょっとわかりにくいですが、グーグルアースとかグーグルマップを使われる方は、

ここをどんどん拡大していくと少しずつ島影があらわれてきます。

マーシャル諸島の中はどうなっているでしょうか。これは地図ですが、ビキニ環礁、ロンゲリック環礁、いろいろな環礁があります。29個の環礁と、それからリブ島、そしてキリ島など5つのサンゴ礁でできた島によって形成されています。先ほど見ていただいたとおり、標高が非常に低いです。山がないので、もちろん川とか谷とかもありません。低い島がずっと連なっていますが、島は、これ全体が島なのではなくて、この黒い線の上に点々と島があります。例えばこのクワジャリン環礁だったら約100個の小島によって形成されていますし、ロンゲラップ環礁だと61個の島によって構成されています。



それでは、核実験の歴史についてお話をします。




きょう皆さんにお配りした資料は、パワーポイントの資料の全部ではなくて、一部パワー

ポイントで見るとわかりづらいものや、あるいは手元にあったほうが良いと思う資料を大きくして印刷しています。

マーシャル諸島では、1945年に第2次世界大戦が終わります。その間、マーシャル諸島はアメリカと日本の戦場でした。多くの日本人兵士の命が失われますが、マーシャルでもかなり多くの人々が亡くなっています。正確な人数を私は把握していません。そういった戦争を経て、1944年ごろからマーシャル諸島はアメリカ軍に軍事占領される状況になります。

マーシャル諸島の核実験の歴史

1946年 米国、マーシャル諸島で核実験開始
 1947年 ミクロネシア、米国による国連信託統治領へ
 1954年 ビキニ環礁で、ブラボ水爆実験
 1986年 マーシャル諸島独立、米国と自由連合協定締結



米国による核実験

マーシャル諸島における核実験
 「影響が明確になるまで実験は海外で行うべき」
 1946年7月1日～1958年 ビキニ環礁・エニウェトク環礁
 計67回 108,496キロトン = 広島原爆の7200発

米国内核実験(ネバダ核実験場)
 1951年1月27日～1962年7月17日
 計87回 1,096キロトン

2017/1/11

軍事占領が続いている状況の中で、1946年からアメリカはマーシャル諸島で核実験を開始します。ビキニ環礁で核実験を開始しました。最初に46年にはビキニ環礁で2回の核実験が行われましたが、左の写真が最初の核実験エイブルです。これは飛行機から原爆を投下する「投下実験」でした。右のものが2回目の核実験ベーカーです。これは水中で爆発させるものでしたので、ごらんになったらわかる

とおりに、下から水柱のようなものが立ち上がっていて、これがかなり周辺に放射能を、水蒸気というか霧のような形でまき散らしました。これ以降、マーシャル諸島では、ビキニ環礁、エニウェトク環礁という2つの環礁で、核実験が67回行われました。

ミクロネシアは、マーシャル諸島を一部を含む広い地域です。ミクロネシアは、日本の植民地統治された時期もあります。1947年には、このミクロネシアが正式にアメリカによる国連信託統治領として認められることになりました。アメリカがミクロネシアを統治することになったのです。その際、軍事利用が可能とされた「戦略地区」という指定がマーシャル諸島にはつけられました。

1954年3月1日ですが、ビキニ環礁でブラボ水爆実験が行われます。水爆実験は、通常の核実験とはメカニズムが少し違って、核融合型の実験でしたので、これは非常に大量の放射能をまき散らす、放射能汚染が非常に激しく起こってしまう実験です。

そして1986年には、マーシャル諸島は、マーシャル諸島共和国として独立して現在に至っています。その際、米国との自由連合協定という条約を締結しています。

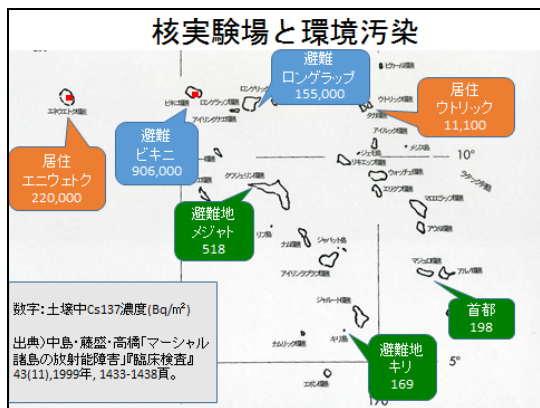
実は1958年には核実験は終了していますが、終了後ミサイル実験が開始され、アメリカの軍事基地からマーシャル諸島にミサイルを撃って着弾させる実験を行っています。この実験は現在でも続いています。1年間に3、4回のミサイル実験が行われていて、その期間にはある一定の場所は船の運航が禁止されますので、私の調査にも今年の2月にそれが大きく影響して、メジャト島に行きたいのに行けずに、何をしに行ったのかわからない調査になってしまいました。

このように、現在でもミサイル実験という軍事利用が続いていますので、このことを行うための条約が自由連合協定なのです。

核実験はなぜマーシャル諸島で行われたのでしょうか。それは影響がはっきりするまでは核実験を海外で行うべきであるという議論が

アメリカで起こります。そして、実際に1946年7月1日から1958年まで、2つの環礁で行われたわけです。注目してほしいのは、1946年にマーシャル諸島で始まっているわけですが、その5年後にアメリカ国内でもネバダ核実験場で核実験が開始されます。期間的にもほぼ同じ10年少し、回数はマーシャルが少なくアメリカがちょっと多いですが、マーシャルは少ないにもかかわらず合計の核実験の総威力が10万8,496キロトンとなっています。これは広島型原爆の7,200発分に相当する威力です。アメリカでは1,096キロトンとなっていて、約100分の1の量しかありません。平均すると1発当たり100分の1ぐらいの小ささですが、マーシャルでは非常に大きな核実験が行われ、アメリカ国内ではそれほど大きくない核実験が行われたことがわかります。

この表は20年前の汚染です。これは1999年に発表された論文の中から引用しているものです。これはマーシャル諸島全土ですが、核実験島は、こちらが赤丸のところ、エニウェトク環礁、そしてビキニ環礁、その2つのところが核実験場です。マーシャル諸島の首都はマジュロ環礁ですが、北部を中心に土壤汚染がひどく、レベルが高いことがわかります。22万ベクレル、90万6,000ベクレルとなっていますし、離れば離れるほど少なくなっていくのがよくわかります。風は左から右に通常は大気が流れていくので、南のほうに向かって風は吹かないので、随分差があることがわかります。



ただ、それほど楽観視できる数値でもないと思います。福島との比較のデータが欲しいところですが、比較できるデータを入手することは難しいので、福島とは比較できません。90万6,000ベクレルというビキニ環礁からどこに避難しているかという、キリ島に避難しています。エニウェトク環礁の人たちは避難しておらず、現在はエニウェトク環礁に住んでいます。ウトリックの人たちもここに住んでいます。そうした人たちは、汚染があることは認識しながらも不安を抱えて住んでいる状態です。ロンゲラップの人たちはメジャト島に現在住んでいて、1平方メートル当たり518ベクレルです。

健康不安は、今回伝えきれないほどたくさんの事例があります。まとめるとどうということかという、マーシャル諸島でのがんの罹患率がアメリカに比べて、男性では2.43倍、女性では3.47倍と非常に高くなっています。これは平均です。部位別のものを全部ならしたものです。

健康不安

マーシャル諸島1985～1994年年齢調整がん発症率
対米国 男性で2.43倍、女性で3.47倍
(出典)Neal A. Palafox M.D., M.P.H.1, David B. Johnson Ph.D.2, Alan R. Katz M.D., M.P.H., Jill S. Minami M.D., Kennar Briand M.B.B.S., "Site Specific Cancer Incidence in the Republic of the Marshall Islands," American Cancer Society, Vol. 83, Issue Supplement 8, 1999: 1822.

マーシャル諸島および米国年齢調整がん罹患率比較

	マーシャル(1985～1994)		米国(1987～1991年)			
	男性	女性	男性	女性		
肺癌	313.8	3.82	122.4	3.03	82.1	40.4
子宮頸がん			278.4	5.85		47.6
消化器がん	21.8	1.88	42.7	8.54	11.6	5
肝臓がん	72.1	15.34	71.8	39.89	4.7	1.8
乳がん			149.3	1.36		109.5
尿道がん	18.4	0.43	80.7	5.85	43.2	13.8
喉頭がん	55.2	3.37	9.2	1.48	16.4	6.2
前立腺がん	31.6	0.62				51
甲状腺がん		0.00	46.3	7.23	2.5	6.4
合計	512.9	2.43	800.8	3.47	211.5	230.7

年齢構成は、1988年のアメリカの人口構成に適合させた

出典)Neal A. Palafox M.D., M.P.H.1, David B. Johnson Ph.D.2, Alan R. Katz M.D., M.P.H., Jill S. Minami M.D., Kennar Briand M.B.B.S., "Site Specific Cancer Incidence in the Republic of the Marshall Islands," American Cancer Society, Vol. 83, Issue Supplement 8, 1999: 1822.

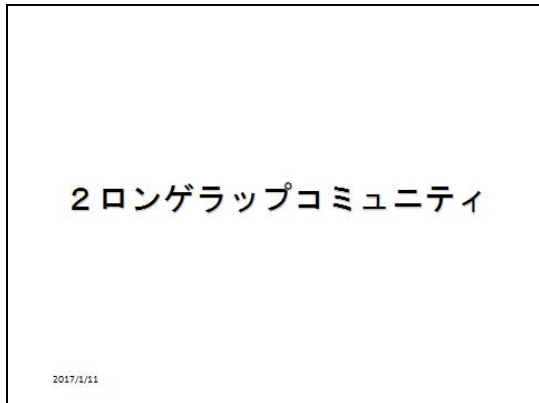
甲状腺への影響は非常に強くて、甲状腺は実は男性のデータがなぜかなくて問い合わせをしますが返事がないので、今年行って聞かなくちゃいけないなと思っていますが、甲状腺がアメリカの女性に比べて7.23倍、肝臓がんも非常に高くなっています。

ただ、ここからは参考に見ていただきたいのですが、これはマーシャル諸島周辺のミクロネシア地域の10万人当たりのがんの罹患率です。これを見るとマーシャルだけが特別高いわけではなくて、もちろん甲状腺がんが高くなっていますが、肝臓がん、肺がんはもっと高いところがいっぱいあるということで、アメリカは核実験の影響だけとは言えないのではないのかと言っています。

がんの部位	北太平洋地域におけるがん罹患率(10万人当たり)							
	ペラウ	ヤップ	チューク	ポナペ	コスラエ	マーシャル	キリバス	ナウル
乳がん	17.1	15.6	7.9	10.7	11.5	36	8	15.4
子宮頸がん	37.5	13.1	4.8	24.8	33.4	60.5	4.5	55
胃がん	1.6	1.1	3	7.7	17.6	2.9	2.2	10.7
血液がん	6	2.7	2.2	4.7	2.6	4.7	2.9	3.2
肝臓がん	19.4	24.4	5.2	11.9	4.1	10.2	0.5	5.7
肺がん	34.6	39.6	24.6	21.3	8.7	41.1	4.4	42.8
喉頭がん	12.4	22.1	3.8	6.2	7.9	12.6	2.4	3.6
消化器がん	12.8	15.6	3.6	5.9	30.9	20.1	5	33.4
尿生殖器がん	13.8	5.8	6	8.2		21.8	5.9	10.3
原発不明がん	26.4	33.2	13.7	11.9	13.5	22.2	14	48.9
前立腺がん	74.9	14	2.5	4.9	10.9	9.3	1.3	2.9
甲状腺がん	4.2	2.6	2.6	3	1.6	28.6	1.2	
統計年	1985-1998	1985-1998	1985-1997	1985-1997	1990-1998	1985-1998	1989-1998	1985-1998

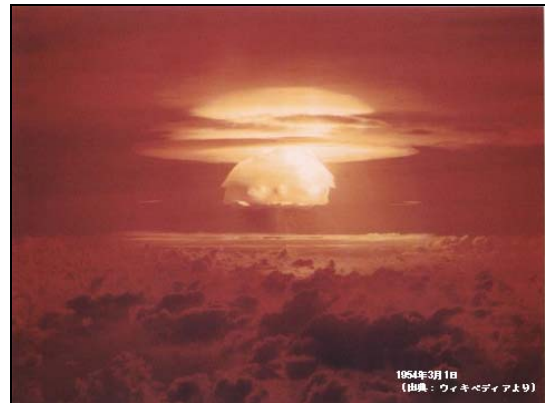
注)年齢別は、WHOの世界標準に合わせたもの。空欄は報告例なし。
Neal A. Palafox, Seiji Yamada, Alan C. Ou, Jill S. Minami, David B. Johnson, Alan R. Katz, "Cancer in Micronesia," Pacific Health Dialog, Vol. 11, No. 2, 2004: 79.

次に、私が調査値として18年かかわり続けているロンゲラップコミュニティの人たちの被曝の実体と、それから現在の様子についてお話ししていきます。



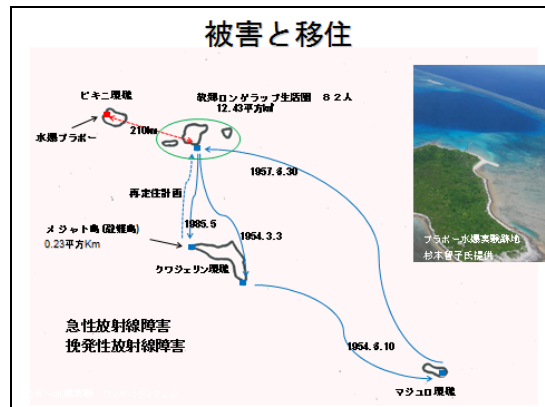
これがブラボー水爆実験です。1954年3月1

日に爆発したものですけれども、広島原爆の1,000倍の威力を持っていたと言われていま



日本の漁船の第五福竜丸も、ちょうどこの日にたまたまマーシャル諸島の近海で操業していたので被曝をし、14日後に日本に帰国するということが起こって、乗組員も被曝をして1名の方が直後に亡くなっています。

ロンゲラップの人々の被害と移住については、この簡略化した地図をご覧ください。



ブラボーの水爆実験があったビキニ環礁は現在このような形になっていて、大きなクレーターがあいています。もちろん海の中なのですが、海の色が変わっています。もともとサンゴ礁がずっと続いていましたが、サンゴ礁が壊されています。この様子はグーグルマップでもグーグルアースでも見る事ができません。

核実験場のビキニ環礁から210キロ離れたロンゲラップの生活圏があります。ロンゲラッ

プの生活圏は、右と左に1つずつ環礁がありますが、この3つの環礁をロングラップの生活圏といいます。ここに82人が住んでいて、環礁全部を使って自給自足的な暮らしを営んでいました。実際に住んでいるのはロングラップ島だけですが、食糧の調達などは3つの環礁全体を使って行っていたわけです。

人々は、ロングラップで被曝しました。被爆直後から急性放射線障害、吐き気、目まい、倦怠感などといった症状が起こって村はパニックになりました。3日後に米軍基地に收容されました。ここで3カ月を過ごします。ここでも症状がなかなか治まらず、髪の毛が脱毛する、それからやけどがひどくなるといった症状が続きます。3カ月後によく落ちついたということで、マジュロ環礁に移ります。ここで3年を過ごします。そして、故郷のロングラップに3年後に戻ることにになります。ただ、このころから女性の流産、死産が非常に多くなってきました。当時、子供が産める年齢の女性で流産、死産を経験しなかった人がいないと言われるぐらい、ほぼ全員が経験しています。中には10人全員が流産だった人もいます。

ロングラップの環礁に戻ってきましたが、ここで人々は生態系の異変を目の当たりにします。釣った魚にこぶがあるとか、木が、ヤシノキの幹が二俣に分かれているとか曲がっているとか、タコノキもありますが、変なところから実をつける。いろいろな生態系の異変を見ることになります。それだけではなくて、1964年からは甲状腺の機能障害、がんといった問題が出てきます。そういった症状を訴えるのですが、なかなか認められず、結局20数年間ここにいることになります。

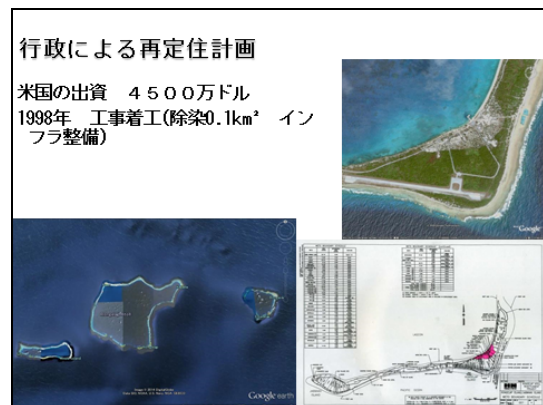
1つ言い忘れていました。甲状腺がんは晩発性の放射線障害の中の1つですが、1970年代からはがんが多発することになります。私はマーシャル諸島の知人とフェイスブックでやりとりしていますが、悲しい知らせなども入ってきます。ちょうど1週間前に、非常にお世話になった、私を養女にしてくれたおうち

がありますが、そのおうちの親戚の方が亡くなられました。今、40代、50代で亡くなられる方が非常に多いです。

そういった晩発性障害が出てきまして、やっとここを脱出できたのが1985年になります。今はメジャト島で過ごしているわけですが、この避難島は0.23平方キロメートルと非常に狭いです。ロングラップの生活圏の54分の1しかありません。自給自足をしたいけど、難しいので、3分の1ぐらいはアメリカの援助食糧、3分の1ぐらいを自分たちが購入したり、あるいはロングラップ地方政府が購入したりしているもので、残りの3分の1弱ぐらいが自給自足という生活がしばらく続いています。現在ではもう少しローカルフードの割合が高まっています。

メジャト島は自分たちの島ではありません。隣の島の所有の土地でしたが、そこからリースをして住んでいるので非常に肩身が狭いのです。やはり自分たちの故郷に戻りたいということで、現在、ロングラップ地方政府によって再定住計画が進められているのです。

再定住計画は、実際にお金を出資しているのはアメリカで、補償の一環として4,500万ドルを拠出しています。このプランを立てるのも全部アメリカ側で、ロングラップ地方政府が承認をしていく、受け入れる形でプランが進められています。



1998年から工事が行われました。まず除染をして、そしてインフラを整えるというのですが、もともとロングラップ生活圏はこの3

つです。この3つですが、ロンゲラップの人たちが住んでいたのは小さなこの島です。除染をしたのはロンゲラップの人が住んでいた島のごく一部のところだけです。除染の広さも0.1平方キロメートルなので100分の1ぐらいになるんですか、本当に小さな面積です。

ロンゲラップの人々は、もともと85年にロンゲラップを離れ、家が多い場所はありませんでしたが、ほぼロンゲラップ島全域に家がありました。それを、あちこち除染するのは非効率的だから、一定の場所を除染して住もうという計画が立てられています。

インフラとしては、道路、滑走路、港、コミュニティセンター、発電施設、水の淡水化装置などをつくりました。そして、現在では、ここに戻ろうとしている人たちの家が建てられています。

これがその家です。すごくきれいになって、マーシャルの離島ではないような、まるでカリフォルニアみたいな感じです。いまはもっときれいになったそうです。



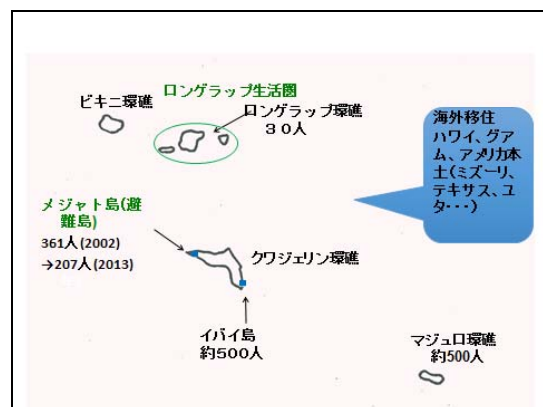
この2つの写真は2002年に私がロンゲラップに行って撮った写真です。ロンゲラップには、奇形のヤシの木が1本だけありました。もう一つは、1980年代にジャーナリストの方が撮られたココヤシの奇形の写真です。人々は、ロンゲラップは危険だからまだ戻りたくない、あるいは戻りたいが実際に戻るのは少し躊躇している状況です。そして、人々が躊躇していることをロンゲラップ地方政府はかなり焦って見ていて、帰島に関する意見をインタビ

ューしている私にも誰が反対をしているか聞いてきます。困った地方政府はどうしたかという、真珠の養殖産業であるとか養豚をして、それを都会に売る。豚はマーシャルでは儀礼のために非常に必要なもので、そういった雇用を生み出すことを行いました。

その結果どうなったかという、2013年の状況がこのように感じになっています。これも必要なところだけ書いたんですが、メジャト島がここです。現在も避難島です。ここは、2002年から2013年まで人口が150人近く減ってしまいました。2002年に行ったときは人がたくさんいて、本当に「うじゃうじゃ」いるという感じでした。2013年に行くと、静かでした。空き家も多くありました。ただ、人口の半分は小学生以下の子供たちで、子供だけにはぎやかにいました。

それでは減った人たちはどこに行ったのでしょうか。雇用の場を求めて、ロンゲラップ環礁、軍事基地の街イバイ、首都のマジュロに移住しています。以前からマジュロとイバイはもともとロンゲラップの人たちが住んでいました。

そして、国内だけではなく、アメリカに移住する人たちが非常に多いです。ハワイ、グアム、アメリカ本土です。ミズーリ、テキサス、ユタが非常に多くなっています。このように現在は、ロンゲラップの除染も済み、インフラも整い、いつでも戻れるという状態になって、人々は急にあちこち拡散し始めているのです。



次に、人々はどんなふうに対応しているのかお話ししていきます。

3. 人々の対応

私は、1998年から2002年までかなり頻繁にマーシャル諸島に行っていました。その後しばらく、8年間は全くマーシャル諸島に行っていません。2010年からは毎年行くことができるようになりました。その時、8年前とは随分変わったと感じました。

第一は、核実験被害者であるロンゲラップの人たちの話す話題です。前は核実験場になったビキニ環礁の人よりも補償金の額が少ないと言っていました。ビキニ環礁の人たちは、核実験が始まる前にアメリカ政府によって強制的に移住させられていたので、高額な補償金が支払われています。それに比べて、被ばくしたロンゲラップの人たちは、アメリカ政府が意図的に被曝をさせたわけではなく、予想したよりも爆発の威力が大きかったという理由で、核実験はアメリカが行ったが、責任としてはビキニほどの責任はないと、補償金の額は半額ぐらいでした。ロンゲラップの人々は、実は体に受けている被害は被曝をしているので、がんも多発していることで、いつがんにかかるかもしれないという不安もあります。こういったことから、自分たちは土地も体も汚染されたのに、補償金の額が少ないのはおかしいと、私に文句を言っていたのです。

ところが、2010年以降、彼らの話題が変わります。保存食を道で会うと、ポケットから出してあ飴をくれたり、作り方を説明してくれ

ました。そのときに話してくれた方は離島の人なので、流ちょうな英語ではないし、私も8年も行ってないのでマーシャル語を大分忘れてしまっていました。マーシャル語と英語で一生懸命、身ぶり手ぶりで話してくれました。

第二は、お土産の変化です。私の調査はインタビューが中心ですので、日本から手土産を持っていきますが、現地の人もお土産を返してくれます。2002年以前はアメリカから入ってくる食糧援助、缶詰、グレープジュースなどの缶ジュースがありました。そのとき、「ごめんね。こんなものしかなくて」という言いながらくれていました。

ところが、最近では、伝統的保存食をくれるようになりました。ロンゲラップでの代表的な乾燥保存食でタコノキという植物の実を干したのがあります。私はタコノキようかんと勝手に名づけて呼んでいるものです。マーシャル語で「ジェンコン」といいます。これがロンゲラップでは昔作られていて、これをお土産としてくれるようになりました。そのほか、いろんな保存食をもらうことがあります。

マーシャル諸島調査における変化 2002年→2010年

核実験被害者の話題
「補償金の額」→「保存食の作り方」

インタビュー中におけるプレゼント
「援助食糧」→「伝統的保存食」



一つ言い忘れていたのは、先ほどの尾松先生の話にもありましたが、ロシアの人たちは、何かゆったりと笑顔で暮らしているというのがありました。ロンゲラップの人たちも以前よりとげとげしさがなくなっているのか、楽しそうに暮らしているところが見られるようになりました。

それは一体どういうことなのかを、社会のあり方から見ていきたいと思います。

別にマーシャルに限らないですが、社会はどうやってつくられているのか。贈与関係とは物をあげたりもらったりという関係ですが、これがすごく大事だとモースという人類学者は言っています。恐らく現代は物だけじゃないと思います。たとえば、あそこのエンジンが今日安かったわよとか、他者のために何かをしてあげるサービスもあると思います。全く同じことを返してくれるわけじゃないけど、別の形としてお返しに戻ってきます。そういう物とか情報とかサービスのやりとりをして社会は成り立っている。

社会をつくるものはなにか

贈与関係
贈る義務 返礼の義務 受領の義務 （M.モース贈与論2014年、岩波書店）

個人レベル
チバン（協力）を断らない

社会レベル
環礁（島）=顔の見える関係=生活圏
別の生活圏とのつながり=交易・儀礼

2017/1/11

もちろん贈与関係が大事だとすると、社会を維持するためには、フリーライダーを許さないように、贈与関係を義務化していく必要があります。送る義務、お返しをする義務、そして、受け取る義務です。受け取る義務はつい忘れがちになってしまいます。こんな趣味の悪いスカーフ要らないわとか、つい言ってしまうたりするんですが、受け取る義務もあるのです。

この贈与関係が一体どういうふうにもマーシャル諸島の中であらわれているのかというと、個人レベル、二者関係で見ると、「チバン」というマーシャル語があります。これは、助けるとか協力という意味です。このチバンの要請を絶対断ってはいけないという規範がマーシャルにはあります。

私が都市部で住んでいた家でも、夜中の1時

に外からトントントンとノックが聞こえてきました。2軒先のおうちの旦那さんが体調悪くなったので病院に連れて行ってと、うちに来たのです。うちには車があったので、奥さんがすぐ車で連れて行ってあげました。そういうことで絶対断らないし、別の近所の人がきょうおかずがないけど何かおかずがあると行ってきたら、冷蔵庫から肉の冷凍したのを渡してあげていました。そのような形で助け合いながら暮らしています。

これを断ると大変なことになります。実は私は1回断ったことがあります。病人が出たから車を出してとか、食べるものがないから食べるもの何かちょうだいというのはわかりやすいチバンです。しかし、わかりにくいのがあります。ある日、私は都会の滞在先で、朝一番に起きて窓をあけました。そしたら、窓の向こうの道を歩いていたのが、離島からたまたま都会に遊びにやってきた男の人でした。私はその奥様と仲がよかったです。奥様はよく私に、「夫がいつも都会に行って、酒を飲んで暴れるのがよくない」と言っていました。私も彼女に賛同しました。その旦那さんが目の前で酔っぱらって歩いていたのです。私の顔を見てほんの5ドルでしたが、お金の無心をしてきました。彼は何度も貸してほしいと言ったのですが、結局私は奥さんの顔が浮かび、奥さんの味方をしようと断り続けました。その日インタビューに行った先で、「ステーキブソンに朝会わなかったかい」「お金貸してって言われなかったか」などそんなことをあちこちで言われました。どこにインタビューに行ってもお金を貸さなかったと非難されるのです。私は、チバンを断ったために、社会的な制裁を受けたということなのです。私は三、四日間、調査がしづらくて本当に大変でした。その行動がいいとか悪いとかではなくて、マーシャル諸島というのは助けることが必要不可欠になっている社会なのです。

では社会レベルではどのような形になっているのでしょうか。1つの環礁はほぼみんなが顔見知りでいろんなもののやりとりをして、

生活圏として成立しています。その関係が環礁の中だけに閉じられているのではなくて、環礁と環礁、別の環礁と、しかも複数の環礁ともつながりを持っています。別の環礁とのつながりは、以前はカヌーを使って交易などを行っていました。現在では飛行機やエンジン付きの船で遠く離れた場所での、葬儀、一歳の誕生日、結婚式などで物が交換されます。100～500人くらいがお葬式には集まり、その際お土産をもっていきますが、お葬式が終わると、また物をもって帰ってくるようになります。こうやって実は社会がつくられています。

では、メジャト島を贈与関係から見てください。

メジャト島を贈与関係から見る

ロンゲラップの思い出
 ○○が「たくさん」あった。
 みんなで「分け合った」。
 => 自給自足・贈与関係の回復

メジャト島
 周辺の自然資源の利用制限
 米国による食糧援助

贈与関係
 贈る＝経済的損失＝権力的優位
 受領＝経済的利益＝権力的劣位

ロンゲラップの思い出について尋ねると、2つの答え方で答えてくれます。○○がたくさんあった。ここには魚、ココヤシ、タコノキなどのものが入ります。そして、それをみんなで分け合ったと言います。

このことから、ロンゲラップの人々は、自給自足の暮らしと、贈与関係を回復することを求めていることがわかります。

現在のメジャト島では、周辺の自然資源に利用制限が課されていますので、アメリカによる食糧援助に依存せざるを得ない状況になっています。要するに、ものをもらって暮らししており、自分で生産するものが少ないのです。だから、他者に分け与えることができなくて、自分も生存が厳しいから、他者から施しを受けている状態です。

この状態は、働かずして生きていけるので一見すると得をしているようにも見えるのですが、贈与関係から見ると違ってきます。モノを送るほうは短期的には経済的な損失ですが、長期的に見ると、ものを分け与えるだけの能力を示すことになり、力関係でみると優位に立ちます。ものを受け取る人たちは、受け取っているのですが、短期的には経済的な利益を得ているのですが、でも、政治的な力関係においては劣位に位置付けられます。

メジャト島の人たちは、被害者の権利としてアメリカや国際的なNGOの支援を受けてきました。しかし、その権利を行使すればするほど権力関係では劣位に陥っているのです。

こういった困った状態ですが、それを今、メジャト島の人たちはどうしようとしているのかを最後に見ていきます。

メジャト島はクワジェリン環礁の端にあります。2013年でここに207人の人が住んでいて、エバドン島には約80人の人が住んでいます。



これがメジャト島の中です。電気や水道はありません。ソーラーパネルが若干ありますが、煮炊きの燃料はココヤシの殻をまきとして使っています。これはココナッツの殻を削って夕食のココナッツごはんの準備をしているところです。

2002年から2013年までの変化を中心に見てきますが、これが2002年の写真。これはほぼ同じ場所から撮った写真です。明らかに木が増えているのがわかります。



大きな変化としては、植林をして木を生やして、植えて、そして保存食をつくっていますが、保存食をつくる前にはジャングルのようなやぶを切り開いていかなきゃいけない。



タコノキは、挿し木で増やします。こうしてタコノキの林があちこちにできました。手前にはバナナやパイヤがあります。2013年には、こういう場所が村の中のあっちこちにできていました。非常に緑が濃くなっていました。

タコノキの実が熟れると、ゆでてすりおろして、シートを広げて、その上にペースト状にしたタコノキの実を広げて天日で干します。干しがきのようなものです。

タコノキようかん以外にもいろいろな保存食がつくられていて、これは「ビーロー」というものですが、パンノキの実からつくります。これは発酵食品で、地面を掘って地中で発酵を促します。これは強烈なおいになります。皆さんにお届けできないのが残念なような、

ラッキーだったような。いま何食わぬ顔をしてやっていますが、カメラを持って近づくと耐えがたいにおいがするんです。食べるとおいしいです。発酵食品なので納豆みたいなものです。

魚をさばいくことも増えたようです。そのあと干物にしています。ココナッツキャンディーもあります。ココナッツの実の果肉をすりおろしたものとココナッツの木の樹液を混ぜて煮詰めて作ります。この男性が素手でくると丸めます。

これはココナッツの木の樹液です。実のほうではなくて、樹液のほうが本当においしいです。さわやかな甘みがあって非常においしい。そのままでも水で薄めても飲めるんですが、少し煮詰めると三、四日もつものになりますし、もっと煮詰めると1カ月とか、冷蔵庫に入ると1年ぐらいもつ保存食になります。このようなさまざまな保存食が量産されるようになりました。



これはメジャトの島の中だけで消費されるの

ではなく、ほとんどが島の外に出ていきます。自分たちで消費するのはわずかです。

例えば、彼女はイバイ島で小学校の事務員をしています。夏休みを利用してメジャト島に帰省していました。彼女はイバイに住んでいます。彼女は、大きなクーラーボックスにメジャト島で採れたローカルフードや保存食を詰めて持って帰りました。彼女が帰宅すると、あちこちから親戚が集まってきて、分けてくれと言ってやってきます。そして、みんなに分けてあげます。日本だったらお土産を持っていきます。でも、向こうは持っていくことは絶対なくて、全員がとりにやって来ます。



②タコノキ羊かんなど保存食の分配

この変化が生まれる背景には、植林をして保存食がたかさんできるようになったということ、それを分配できるようになったのが大きいと考えています。

植林をして、メジャト島という避難島が緑豊かになって、しかも人々の笑顔がふえていく。こういった変化はメジャトの人たちだけの努力で実現できたのかというと、そうではありません。やはり近隣の島々との関係性がうまくつくられることによって、これが実現できたのです。

メジャト島が位置しているクワジェリン環礁は端から端まで120キロぐらいあります。ボートで3、4時間ぐらいかかりますが、この中の島の住民との関係性ができてきています。

メジャトと隣の島のエバドン島の関係は特に重要です。メジャト島には1986年にロンゲラ

ップから避難をしてきました。その時メジャト島は無人島でした。南の島の無人島といったら緑が生い茂っていて楽園を想像される方もいるかもしれませんが、無人島である理由は、住みにくいからです。メジャトは非常に住みにくくて荒れた場所でした。メジャト島は地下水は恵まれていましたので、エバドン島のオーナーたちは、地下水汚染の不安から、メジャト島での埋葬を禁止しました。実はロンゲラップからメジャトに移住してきたときに、福島原発の避難でもあったことですが、真っ先に犠牲になるのが体の不自由な人とかお年寄りです。直後にお年寄りが亡くなるわけですが、遺体を埋葬してはいけないと言われてまして、実は最初の3年間ぐらいに亡くなった人はエバドン島に埋葬されています。



もう一つ、メジャト島で漁労活動、魚をとる場合はメジャトの近場に限定とされていたので、たくさんの魚を収穫することはできませんでした。

それがしばらくたつと、エバドン島とメジャト島との関係性が変わってきます。婚姻関係が生まれたのです。主にロンゲラップの男性とエバドン島の女性が結婚することが多かったのですが、そうなってくると、あの人たちはもう親戚だからと、メジャト島にあるアメリカからの食料品を分配するようになってきました。要するに、ロンゲラップの人としてカウントをされていきます。

また、メジャト島は、被害地としてアメリカからの経済的な補償金が入ってきますので、それを資金として店舗を運営していました。

エバドン島の人たちは、その店舗を利用したり、その店舗から仕入れてエバドン島でお店を経営したりする人たちが出てきました。

また、メジャトは日本の援助団体から日本の古い漁船を寄附してもらっていたので、イバイとの間を1週間に1回ぐらい行き来していました。今その船は壊れてしまってもうないですが、行き来していたので、その船にエバドン島の人も乗せてあげて、エバドンの人たちも便利に都会に行けるようになりました。

そうなってくると、次第に埋葬の許可があり、遠方への漁に対しても文句を言わなくなったそうです。遠方での漁撈活動により、自然の知識を獲得することができます。自給自足できると、どこに行っても自給自足できるのではないのかと思ってしまいがちですが、何で自給自足ができるかという、その地域の自然環境をよく知っているからです。

例えば海だったら、どういう潮の流れになっているのか、どういうサンゴ礁になっているのか、どの辺にどういう魚がいて、どの魚は食べることができるのかという知識です。マーシャルでは、ある特定の魚が毒魚になります。Aという魚が、例えばロングラップで毒魚になったとします。しかし、同じAという魚は、クワジェリン環礁のある部分では毒魚ではなかったりします。何をとっていいのかも環礁と地域ごとによって異なってきます。そういう知識が環礁ごとに世代を超えて受け継がれてきています。そういった自然を知らないで、最初は何もとれないです。それを試しながら、自分で少し食べて舌がしびれないから大丈夫だと思いながら、どんどん試しながら自然環境の知識を蓄積していくことができるようになりました。

そうなってくると、生活に余裕が生まれるので、魚がたくさんとれて干物がたくさんできる。生活に余裕が生まれて、じゃあ、植林でもしようかと。植林をすると、ヤシノキがたくさんとれます。食糧にもなりますけれども、現金収入にもなるわけです。よその環礁の100分の1にもならないですが、少しずつ現金収

入を得られるようになってきています。

もう一つ、コブラができるとヤシノキの実がたくさんあるわけですから、残った分の果肉の部分は豚の餌になり、豚をたくさん飼うことができるようになりました。豚は儀礼の際に必要なので、豚をたくさん育てると結婚式とかいろんなときに食べることができますが、それだけではないんです。必ずしもお葬式があるときにいいころ合いの豚がいるわけではないため、エバドン島と融通し合います。これをマーシャル語でコーカン（交換）といいます。もちろんこれは日本語からの借用です。ころ合いのいいブタを交換し合うネットワークの中に組み込まれるようになりました。

このようにして実は関係性が深まってくることによって、メジャト島の生活がだんだん豊かになってきたのです。

インタビューしていると豚が後ろからついてくるのです。こんなに豚がかわいいとはびっくりしました。

これはメジャトの村の中の風景ですけど、島が狭いので、隣の家が本当に近くひしめき合っています。本当だったら離島は、家があって、林がずっとあって、昼間は隣の家は見えません。夜になると明かりがついているのがヤシノキの林の間から少し見えたりするので、あそこに家があるなどわかります。



豚はいたるところにいます。子供たちが遊んでいるそばにも豚はいます。男性たちが魚をさばっているそばにも豚はいます。



先ほど船に乗せてローカルフードを運ぶ話をしましたが、荷物だけ運ぶこともあります。豚も船に乗せて運びます。豚は汗腺がないので暑さに弱いので水をかけて冷やしてあげています。

船はこれで出航すると言って、さよならと言ってみんなが泳いで船の近くまで来てくれます。



最後に重要な点をお話します。今、メジャト島は第二の故郷になりつつあるのではないかと、そういう過渡期だろうと思います。ロンゲラップに帰島するとして「じゃあ戻しましょう」とみんなが戻ったとしたら、除染はごくごく一部なので不十分です。結局、周辺の利用は制限せざるを得ない。そうすると、帰ったとしても米国による食糧援助は続くことになります。

贈与関係で見ると、ロンゲラップでの生産物の価値は、たとえロンゲラップに帰って、法律で禁止されるわけではないので、じゃあ、

ヤシノキで何か保存食をつくったとします。でも、やっぱりそれは汚染されていると思われるてしまいます。実際、労働者として戻っている男性がヤシガニなどを持って帰っていますが、そういった行為に対して、ロンゲラップ以外の人たちは、危険をまき散らしていると非難しています。

第二の故郷としてのメジャト島

ロンゲラップへの帰島
除染の不十分さ→周辺の利用制限
→米国による食糧援助

贈与関係
ロンゲラップでの生産物の価値
受領=経済的利益=権力的劣位

メジャト島
故郷の生産物の復活
贈与関係のネットワークへの参加

先ほど尾松先生がおっしゃいましたが、風評被害という言葉がないとおっしゃいましたが、マーシャルにも風評被害という言葉はありません。ただし、危険をまき散らすとか、そういうことは言っています。言葉がもっと具体的な、これを持って帰るのはよくないという具体的な言葉で伝えていくので、ステレオタイプ化された風評被害とか、そういう言葉は余り聞きません。

結局、援助が続くので物をもらうことにはなりますが、そうすると権力的なポジションも下がってしまう。人にあげることができない人になってしまうのです。

メジャト島にとどまる限り、故郷の生産物を何とかメジャト島で復活させようとしてきた30年間でしたが、やっと今それができているわけです。しかも、メジャト島を中心とした贈与関係のネットワークへの参入が果たされていて、ロンゲラップともつながりを持った状態です。ロンゲラップに定住することはまだできてないですが、ロンゲラップに行こうと思ったら行ける状態、アクセス権を残しながらメジャトでの生活を立て直しているのが現在の状態です。

このように暮らしの場所を人々は30年間かけて1986年からつくってきたと思います。マーシャル語で「カピジュクネン」という言葉がありますが、カピジュクネンとは暮らしの場所、大切な場所、居場所、家のある場所、住む場所、私の場所とか、日本語にするといろいろな意味があります。カピジュクネンについてアメリカに移住した人に聞いてみると、メジャト島は私のカピジュクネンだ、ロンゲラップはもう私のカピジュクネンじゃない、私のカピジュクネンはメジャト島、アメリカはカピジュクネンとは言わない、確かに住んでいるけど、これはお金を得るための場所だから、カピジュクネンじゃないと。でも、ロンゲラップは大切だから、ロンゲラップで子供を育てたいという人もいます。これは若い人が言っています。その人がメジャト島は私のカピジュクネンじゃないと言っています。まだ調査は半ばですが、みんなの意見はばらばらです。

暮らしの場所を作る

「カピジュクネン」

暮らしの場所、大切な場所、居場所、家のある場所、住む場所

「メジャト島は私のカピジュクネンだの」

「ロンゲラップで子供を育てたい」

「メジャト島はわたしのカピジュクネンじゃない」

協働の漁業、保存食生産の増加、ローカルフードの増加

メジャト島が「故郷」になる過渡期

科学的・工学的対処 と文化的対処

2017/2/11

でも、1つだけ言えるのは何かというと、協働で労働をする、魚をとることはふえているし、保存食を生産することもふえています。ふえているどころか何倍にも、100倍ぐらいになっています。ローカルフード、現地で生産するものはもちろん増えているわけです。

こういったことから見ると、現在は、行動としてはメジャトを故郷にしようとしている行動は見られるけど、意識の上でまだ何か半々と迷っている状態にあるのかなと思います。恐らくメジャトが故郷になる、故郷はマーシ

ャル語で別の言葉がありますが、故郷になる過渡期ではないかと思います。

地域をつくり直していくとか生活を再建するところから考えると、科学的、工学的な対処は再定住計画で、ブルドーザーで除染をして、そして薬剤、カリウム溶剤をまいていくわけです。そういった除染や安全基準を設けることも大事かもしれないですが、そういうのがあるから、ロンゲラップにいつでも帰ろうと思ったら帰れるよねという気持ちになれると思います。ただ、それだけではなくて、文化的な復興というか、文化的なものも取り戻していくようなことがないと、人々は生活を取り戻したとは思えないのではないかと考えます。

最後に1つだけ、ロンゲラップというかメジャトで問題があるのは、こういったローカルフードをつくって、さまざまな保存食をつくったとしても、それを運ぶ船がないのです。結局、先ほどの船は、教育省が夏休みの終了を前に都市部でトレーニングしていた教師を離島に戻す交通手段がなかったので、臨時に運行させた船なのです。ですから、保存食をつくったとしても、それを送り届けることがなかなかできないという問題点があります。

それは、ロンゲラップ地方政府にお金がないわけではなく、さまざまなインフラを整えたりするのにお金を使っているんで、もう少しこれを文化という側面に照らし合わせて、ここにも予算を割っていく施策が必要なのではないかと考えています。

○野呂 水爆実験によって喪失したものをどう取り戻すか。贈与を通じてのネットワークに加わっていくことを手立てとして、伝統食を復活させることで自分たちの存在価値を見出しつつある。30年以上かかってようやくそこにたどり着いたが、中原さんは十何年間通い続けた中でその変化を目の当たりにしたということです。興味深い話をありがとうございました。